

広島平和教育研究所主催

第4回「戦争・被爆体験を聞く会」のご案内

証言者：豊永恵三郎(とよなが けいざぶろう)さん

日時：2017年9月23日(土) 10:00～12:00

場所：三原市市民福祉会館

会議室 403※参加費無料

日程 10:00 開会行事
被爆体験証言
質問・交流
閉会行事
12:00 解散



今、聞かなかつたら、遅い！ヒロシマを伝えよう！

職場の若い仲間も誘って参加をしよう！

豊永 恵三郎(とよなが けいざぶろう)さん(1936年横浜市生まれ)

「韓国の原爆被害者を救援する市民の会・広島支部」前支部長。

1939年、両親の出身地である広島に転居。1945年8月7日、8日と母と弟を探して入市被爆。1961年、広島大学を卒業した後、私立広島電機高校(現広島国際学院高校)の国語教員に。韓国を中心に、在外被爆者を支援する活動を続けている。1984年に修学旅行生などへ被爆体験を語る「ヒロシマを語る会」を結成。この会は2001年に解散したが、有志と証言活動を続けている。

<在外被爆者をめぐる諸問題>

1. 我が家の被爆体験
2. 在日コリアンとの出会い
3. 在韓被爆者運動 a.韓国原爆被害者協会の結成 b.孫振斗手帳裁判 c.渡日治療
4. 在外被爆者裁判
5. ヒロシマの課題

三原市市民福祉会館

三原市城町1丁目18-1

電話 0848-63-4077

【申し込み・問い合わせ先】

広島平和教育研究所(TEL.082-264-1751)まで。

ヒロシマ〜ハブチョン

韓国人被爆者の65年

- 7 -

被爆「先生」支援の旅

帰国後も続く窮状

原 爆症認定を受けた韓柱錫(73)＝韓国・大邱＝から

託された感謝の言葉を、私(記者)は帰国してすぐ「韓国の原爆被害者を救済する市民の会」広島支部長の豊永恵三郎(74)に伝えた。豊永は今も、リュックに資料を詰めて広島中を歩き回り、年に数回は韓国に渡る。17年前まで高校の国語教師だった彼を、多くの人が親しみを込めて「豊永先生」と呼ぶ。

豊永は9歳のとき、広島で被爆した。市内の自宅も焼け、郊

外の祖父母宅に身を寄せた。近くに軍需工場があり、善脈や廃品回収で暮らす朝鮮人集落もあった。朝鮮人の親友もできた。在日韓国・朝鮮人に対する厳しい差別の存在に直面したの

は、広島私立工業高校の教員になってからだ。どれだけ頼んでも、大手企業は在日の生徒を採用してくれなかった。生徒たちは本名を名乗らず、「在日」であることを隠した。

生徒間のトラブルから朝鮮学校の教師と話し合った。朝鮮語の授業を始め、「在日の生徒は胸を張って本名を名乗ってほしい。日本人の子は在日の友人を本名で呼んでほしい」と呼びかけた。差別をなくす第一歩と想ったことだった。

そんな豊永にしても、韓国に帰った被爆者が援護の枠外に置かれていくことまでは思いが至らなかった。

71年、豊永は韓国政府の教育研修に招かれた。出発前日、韓国原爆被害者協会の会長(当時)、辛泳洙が来日して窮状を訴える様子をテレビで見た。研修の合間にソウルの裏通りにある掘り立て小屋の協会事務所を訪ねた。役員は「韓国からも、日本からも見捨てられて

いる」と訴えた。豊永は手元にあった50㍊を差し出した。韓国では、原爆は日本による植民地支配を終わらせることにつながったという見方もある。特に言論の自由もない軍事政権下では、被爆者たちは声を上げることができなかったのだ。

その後、50㍊の一部を受け取ったという李順玉から日本語の札状が届いた。広島で被爆した順玉は母が死に、父も行方不明。自身も足が不自由になり、帰国後はどん底の生活をしていった。唯一の肉親となった妹も「子どもが産めない」と離婚され、命を絶った。豊永たちが支援を続け、順玉は5年後に被爆者健康手帳を手に入れることができた。



平和学習に訪れた小学生に被爆時の体験を語る豊永恵三郎。「いじめや差別のない学校を作ることが、明日からでもできる平和活動だよ」＝広島市中区中原資料館で

韓国の原爆被害者を救済する市民の会 大阪の市民らが中心となって71年に設立。事務局は現在、大阪府豊中市に置く。「被爆者はどこにいても被爆者」と高裁が判断し、在外被爆者への被爆者援護法適用に道を開いた「郭貞勲(カク・キフン)訴訟」などを支援してきた。訴訟支援や交流活動などが評価され、昨年度には「大阪弁護士会人権賞」を受賞した。大阪、広島、長崎に支部があり、会員約500人。

今 月19日、豊永から私に電話があった。戸籍に誤記があり手帳を取れない女性の記事(16日付本欄)を気にかけていた。「何とか手帳を取らせてあげたい。あなたも協力しなさいよ」。「先生」の言葉に私は深くうなずいた。(敬称略)

Reportage ルポ2010

【樋口岳大、写真も】